

《入江 杏》氏

「悲しみを生きる力に」

世田谷事件の遺族として

2000年12月31日、20世紀最後の日に発覚した事件によって、私は妹一家と二度と会うことができなくなってしまいました。「やっちゃん」と呼ぶ、とても仲のいい妹でした。お連れ合いのみきおさん、そして二人には当時小学2年生だったいなちゃんと、弟の礼君という子供がいました。閑静な住宅街で起きた猟奇的な事件と、沢山の報道がなされました。第一発見者である私の母は、「あなたの旦那さんも仕事ができなくなるかもしれないし、あなたの子どもも学校でいじめられるかもしれない。だから、この事件のことは誰にも言わないで欲しい」と言いました。その母の強い思いもあり、6年間、「私は世田谷事件の遺族です」と言うことはできませんでした。

この体験を伝えることができるようになった一つに、入江杏（いりえ あん）というペンネームがあります。作ってくれたのは、当時中学一年生だった私の息子です。亡くなった姪のいな（NINA）と甥の礼（REI）、この二人の名前から、入江杏（IRIEANN）が生まれました。この名前でもみんなの心に届く、亡くなった4人の話をする勇気を持つことができるのだったらやってみて背中を押してくれたのです。この名前には亡くなった妹一家4人の魂がこもっていると感じています。

グリーンケアとの出会いもありました。グリーンケアとは、亡くなった人たちと出逢い直すことだと思っています。グリーンケアを通して、「ああ、こんなふうになんか一生懸命生きていたんだね、ありがとう。今の私があるのはあなたたちのおかげなんだよ」と伝えることができ、亡くなった人たちとの出逢い直しが叶えられる瞬間です。

悼む思いがいのちをつなぐ

私が主宰する「ミシュカの森」では、悼む思いがいのちをつなぐという思いを通奏低音に、一人ひとりの中にある悲しみの種からネットワークをひろげていこう、悲しみからつながっていこうと2006年から活動しています。

今年3月にニュージーランドでイスラム寺院襲撃テロという残忍な事件が発生しました。直後のアーダーン首相のスピーチに、私たちは、グリーンケアに関する大切なメッセージを聴くことができます。「悲しんでもいいんだよ、助けを求めてもいいんだよ」。悲しみを出してもいい、出せる社会をつくるから、社会の側が悲しみを受け止めるからという内容は、グリーンケアの公共性を支える大切なメッセージだと思います。「悼む思いがいのちをつなぐ」という言葉に凝縮される心に残るスピーチでした。

また、「ケアの文脈」においては限りなくその人の物語でありたいと思っています。私は、上智大学グリーンケア研究所の講座で、対人援助の基本を取り上げることがあります。どんな人もその人独自の物語がありその物語こそその人の核であり、尊厳の源。「遺族はこう悲しむべきだ」ではなく、その人の物語を聴き取り共感できる感性を身につける、これが基本であるとお話しています。さらに、語るには、弱い立場の人がどれほどのためらいを抱えるかということをお伝えすることも私の役割の一つだと思っています。

一橋大学大学院の宮地尚子先生の研究に「環状島モデル」と呼ばれるものがあります。この環状島というのは、輪になって海に浮かんで見える火山島のこと。爆発して山頂が飛ばされた後、雨が降り、内海

ができる。最も悲しみを受けた人はこの内海に沈んで声も上げられません。一番声に出せないのは亡くなってしまった人ですが、事件の後、本当に涙も出ない、夢でも会いたいと思うのに夢も見ないと話した母もそうだったかもしれません。また、内海から斜面を上がっていく人、そして、自分の悲しみの経験などを話そうとする人、恐らく私もその一人だと思いますが、悲しみを表出できる環境や社会をつくること、悲しみを受け止める社会をつくるということは、大切な課題だと思います。

私を変えた一枚の絵の物語

あの事件、あの出来事によって、母も私も多くのものを失いました。

姪のいなちゃんは母にとって自慢の孫でした。

いなちゃんの担任の先生から、お葬式の日に手渡された一枚の絵。私は、すぐに「スーホの白い馬」の絵だとわかりました。モンゴルの草原で、母馬からはぐれてしまった白い仔馬を貧しい羊飼いの少年スーホが救い上げるというシーンの絵でした。私はスーホになれなかった、スーホのようにあの子たちを助けてやれなかったという、自責の念＝サバイバーズギルトがこみ上げてきました。

ただ、その絵をもう一度よく見ると、原作の中には出てこない、頭にバンダナを巻いた羊飼いの少女の姿が描かれているのに目が留まりました。その顔はにっこり微笑んで少年スーホを見上げている。いなちゃんは自画像をこの絵に描き込んでくれたに違いないと思いました。事件発覚の前日、最後に見た、頭にバンダナを巻いて、家族で大掃除を頑張っているいなちゃんの姿そのものでした。

私を支えてくれる夫と、息子の存在。私は、前を向いていこうと思いました。いなちゃんが微笑む少女の姿をこの絵に描き込んでくれたから。

非業の死を遂げた白馬の遺志に従い作られた楽器、馬頭琴が人々の心を慰めたという「スーホの白い馬」、私もスーホのように遺志を聴き取り、社会につなげていけたらと。それが私に与えられた「道しるべ」であり、私の「ライフストーリー」であると感じています。